

Room_412 Single Channel Video Show

2022年9月21～10月2日(月,火休廊)
12:00～20:00

荒川弘憲 / Koken Arakawa
林深音 / Mio Hayashi
ヒキタサエ / Sae Hikita
井上晴日 / Haruhi Inoue
石井孟宏 / Tommo Ishii
石崎朝子 / Asako Ishizaki
熊谷円 / EN KUMAGAI
榑原幹治 / Kanji Kuwahara
眞藤雪乃 / Yukino Mafuji
元岡奈央 / Nao Motoka
大本梨奈 / Rina Ohmoto
佐々木万志帆 / Mashiho Sasaki
佐藤 瞭太郎 / Ryotaro Sato
鈴木彩奈 / Ayana Suzuki
柳田美侑 / MIYU YANAGIDA

東京都渋谷区桜丘町15-8
高木ビル412号室
<http://room412.jp>



荒川弘憲 / Koken Arakawa

《榮榮たり 窓下の虫かご》2022 11' 34”



【作品解説】

2020年10月茨城県牛久沼のとある谷津地で300コ以上の虫かごを並べて風景をじゃむ (Jam) した。そのときのことは僕の額にとりつけたカメラによる一人称視点と、虫かごのなかにカメラを忍ばせた虫かごの内側からの視点による映像とによって膨大なデータサイズとして残されている。この映像をもとにデジタルによる時間の伸縮やカットアップなどの操作を導入させてつくったのが本作。作者と虫かごの記憶らしき時間イメージには奇妙な混交が生じ、無音にも関わらず映像からうけとられる世界は騒々しい。だからタイトルに「榮榮たり」といった。映像を観る普通の僕によって、映像にうつつている虚像も、動かない物体も生きてしまっているようだ。

タイトルに困って手にとった陶淵明の詩集のはじめにあった「榮榮たり窓下の蘭」からタイトルは拝借した。友人の中国の留学生に意味を訊ねてみると、「窓の下では蘭がいっぱい花開き」という意味のようだ。カメラのレンズでは収まりきれない複数の虫かごの輝きは、収まりきってないからこそいっぱい虫かごがあることを感じられるわけで、窓やカメラのレンズがのぞくあちらがわではなく、その内側にいるものとしての寂しい焦りと、世界への好奇によるアンビバレントな感情をタイトルに便乗させたつもりだ。

【略歴】

1993年ソウル生まれ。現在、茨城と千葉を主な制作場所に活動。東京藝術大学美術研究科先端芸術表現専攻修士課程在籍。

【ステートメント】

一人称視点の映像や内臓、幼児性などに関心をもっている。事物を混ぜていくように扱うなかでの美的経験とそのリアリティを源泉に映像や絵、ものをつくっている。

【URL】: arakawakoken.net

林深音 / Mio Hayashi
《一反木綿》 2017 1' 41”



【作品解説】

動きや記憶が断片ではなく、アナログ的な連続量として累積されていく様を、1つなぎの大きな布からなる、複数の繋がった衣服を用いたパフォーマンスで表現している。

《compass2》2021 2' 20”



【作品解説】

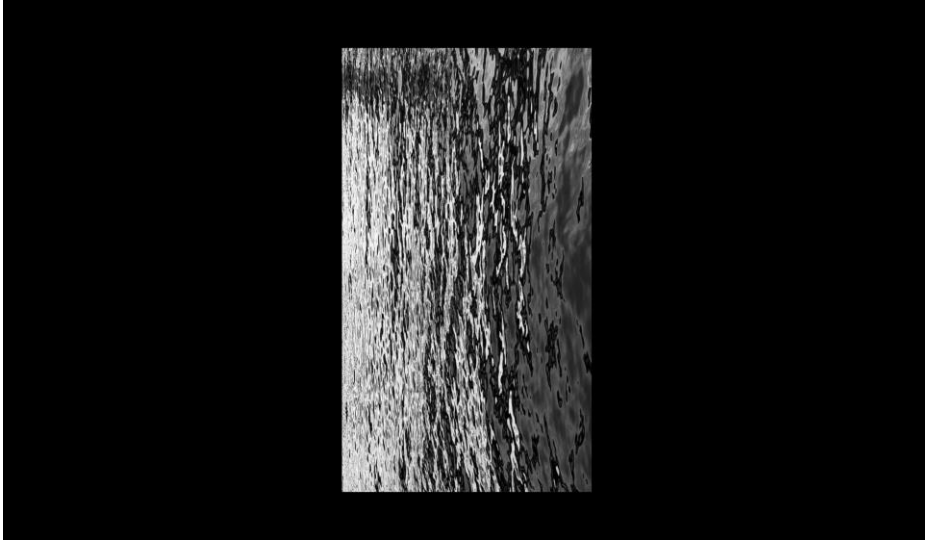
森羅万象を、永劫回帰としてこれを肯定した西洋の超人もいれば、輪廻転生としてこれに絶望し悟りを開いた東洋の聖人もいる。

真理かは別として、これらの思想の発生から帰納できることは、古今東西、どこにも行き着かない状況に対して、円を描くことでこの状況を捉えようとしたということではないか。

【URL】:<https://oil.bijutsutecho.com/artist/1000>

ヒキタサエ / Sae Hikita

《native・drag・view》 2022 :4' 02”



【作品解説】

勝手に意味を受け取って読んでみる。光を素材にしてみる。シグナルを発する。これらを遊びのルールとして制作した。

【略歴】

1997年生まれ

2021年 多摩美術大学 油画学科 卒業

同年 東京藝術大学 美術研究科 第3研究室所属

【ステートメント】

「意味」を捉えようにもその全貌が見えない。

イメージと物質を一つにまとめた異物(大小や必ずしも質量があるとは限らない)を作ることで、引っかかりができる。引っかかりは意味として読み込まれていくのではと考えています。



Side Fiction

井上晴日 / Haruhi Inoue

《Our bodies are in the air now-私たちの体は宙に浮いている》

2022 2' 45"



音楽:天野直美
衣川藍
堤一真
堤あい
shishikuramakico

協力:柴崎愛子
高木樺恋
松下葉月

【略歴】

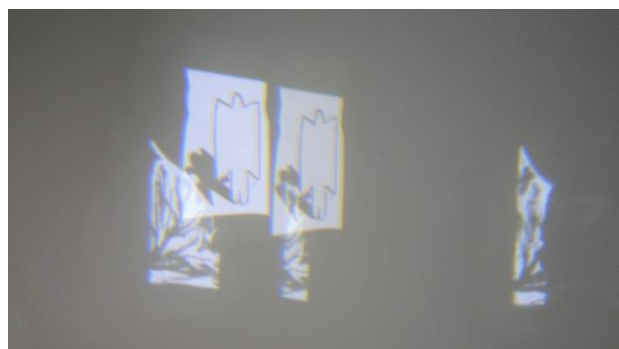
1993年福岡県出身。2016年武蔵野美術大学油絵学科卒業。異なる時間軸が作品を介して同じ空間に存在することをテーマに、平面、鏡を使ったインスタレーションを中心に作品制作を行っている。

【ステートメント】

あまりにも崩れやすいことがわかった社会の中で、日常と緊張がばらばらになって散らばっている。

ほとんどの人は、幸運にも緊張を忘れ去ることができる日常を持っていて、でも少しだけその肩は重くなる。

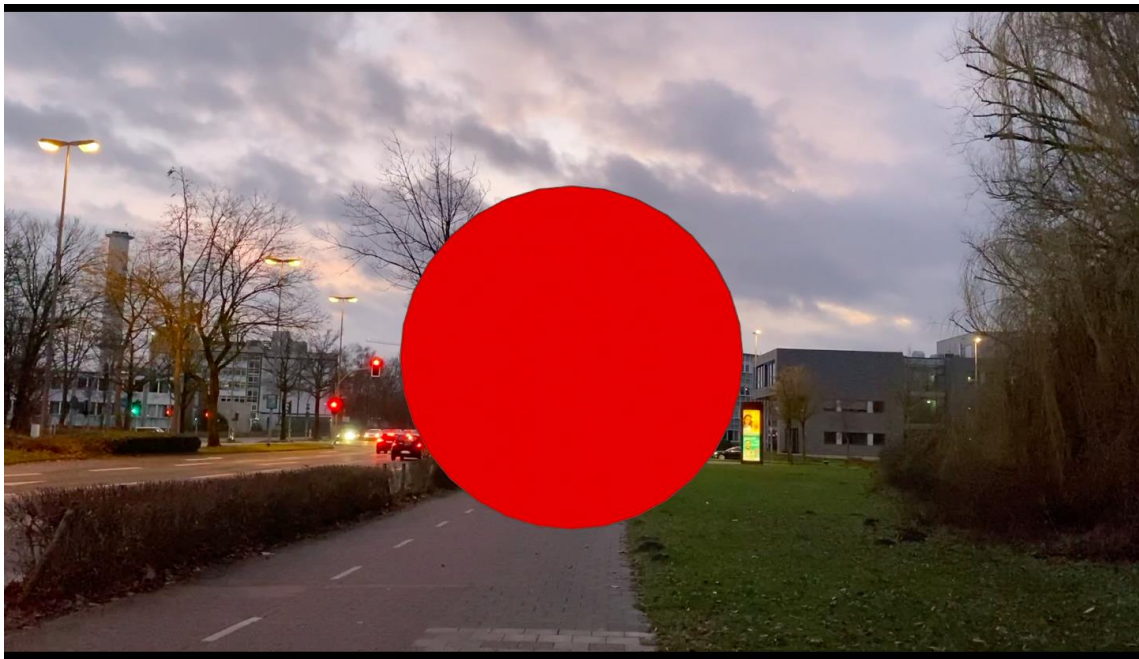
今宙にある人が見た景色を、私たちは思い出すことができる。



【URL】:Instagram:<http://instagram.com/haruhi.inoue/>

石井孟宏 / Tommo Ishii

《M ü nster, where I hear the sounds》 2022 13' 50”



【作品解説】

初めて“アーティスト”として留学をした。

日々を過ごす中で特に意識したものは鳥の鳴き声などの自然から救急車やパトカーのカラーリング、サイレンなどの社会的な物まで、同じものとして認識可能でありながらも日本のそれとは違うという差異の部分であった。

違う文化圏から来た者であっても共通の言語があればコミュニケーションは取れる。しかし上記の環境が言葉以前の部分を形作っていると言えるだろう。そして本作品はその言葉以前の、普段は意識しない部分にフォーカスを当てている。

【略歴】

1995年生まれ。東京をベースに活動している。大学では哲学を専攻し、2019年から東京藝術大学大学院美術学部GAP専攻に所属。2021年10月から2022年10月までドイツ、ミュンスターのKunsttakademie M ü nsterに留学。

【ステートメント】

スケートボード、グラフィティなどの所謂ストリートカルチャーからの影響の下、古来から受け継いでいるにも関わらず時代、社会情勢などと共に変化する人間の認知、認識について彫刻、音楽、機械改造などの複数の領域から考察、そして制作している。

【URL】:instagram : https://www.instagram.com/fantome_experiments/

石崎朝子 / Asako Ishizaki

《Following sky》 2021 20' 26"



【作品解説】

1969年のヴィト・アコンチによる《Following Piece》(追跡者)という作品を引用し、渋谷の街にいた任意の人物を追跡して、上方の空の景観を追体験する映像作品。

追跡によって断片的に映し出された都市の光景は、目的地を持たず、都市空間そのものの濃淡を経験する都市横断の形となる。

SHIBUYA 109やスクランブル交差点、宮下公園などの特徴的な渋谷の記号の背景に見える空は、情報が重層化する都市のアウトラインを強調するための背景色のように映る。

【略歴】

栃木県生まれ。武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業。

現在同大学大学院修士課程彫刻コース2年在籍中。

【ステートメント】

ストリートのリアリティから出発した表現をテーマに、彫刻・映像・パフォーマンスを用いて制作活動を行う。

都市空間のフィールドワークを通して風景の中に見出す様々な断片を作品に変換している。



《Street White Section》2022 ミクストメディア, シングルチャンネル・ビデオ

【URL】:Instagram:https://www.instagram.com/asako_ishi/

WEBポートフォリオ:https://drive.google.com/file/d/1AG-RH8pfGGvi_5p96jdp1RVlvhyeVMyg/view?usp=sharing

熊谷円 / EN KUMAGAI

《PEACE POT MICRODOT 2022 3' 44"》



【略歴】

東京を拠点に2021年より活動。

2021.5月 個展「AGAINST THE DAY」Mulberry Field Gallery M

2021.11月 個展「INCORPOREAL CAPSULE」Room_412

2022.2月 映像・音楽提供 VINTAGE POP UP PROJECT「SURPLUS_2501」G9G GALLERY CHORUS

2022.5月 映像・音楽提供 VINTAGE POP UP PROJECT「SURPLUS_2501」G9G GALLERY CHORUS

2022.6月 個展「WHITE SUBMARINE tuning」黒猫茶房

【ステートメント】

生まれつき視覚と聴覚の働きが連動する身体性から、時間や感覚のずれ、記録装置に興味を持つ。

主に車窓や水槽など透明の膜を表現のモチーフとし、写真・音響・映像・ファブリック等を用いたインスタレーションを行う。

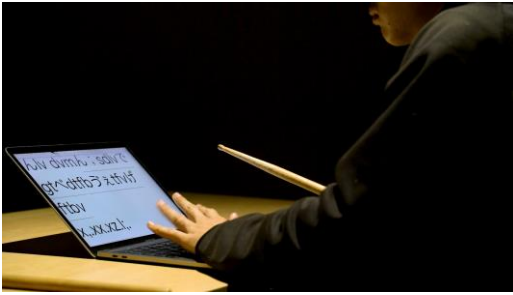
【URL】

<https://www.instagram.com/enkumagai/>

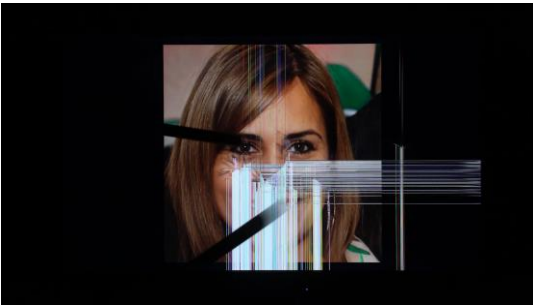
栗原幹治 / Kanji Kuwahara

《Objets - Laptop》2022 5' 49"

《Objets - Dump》 2022 8' 11"



《Objets - Display
(with Nonexistent Face)》
2022 3' 50"



【略歴】

アーティスト／打楽器奏者。リズムという摩訶不思議な概念を「野生的な知」として捉え、演奏行為や運動現象をもとにした映像、ドローイング、サウンドインスタレーション、パフォーマンスを制作する。

1998年生まれ。2021年東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業。現在は同大学院映像研究科修士課程メディア映像専攻に在籍。音楽プロジェクト「カプトムシ」や即興打楽器集団「LA SENAS」のメンバー。

個展

2022 「身を以って」Room_412
2021 「リズムのための試論」Room_412

【URL】:acpmk.net

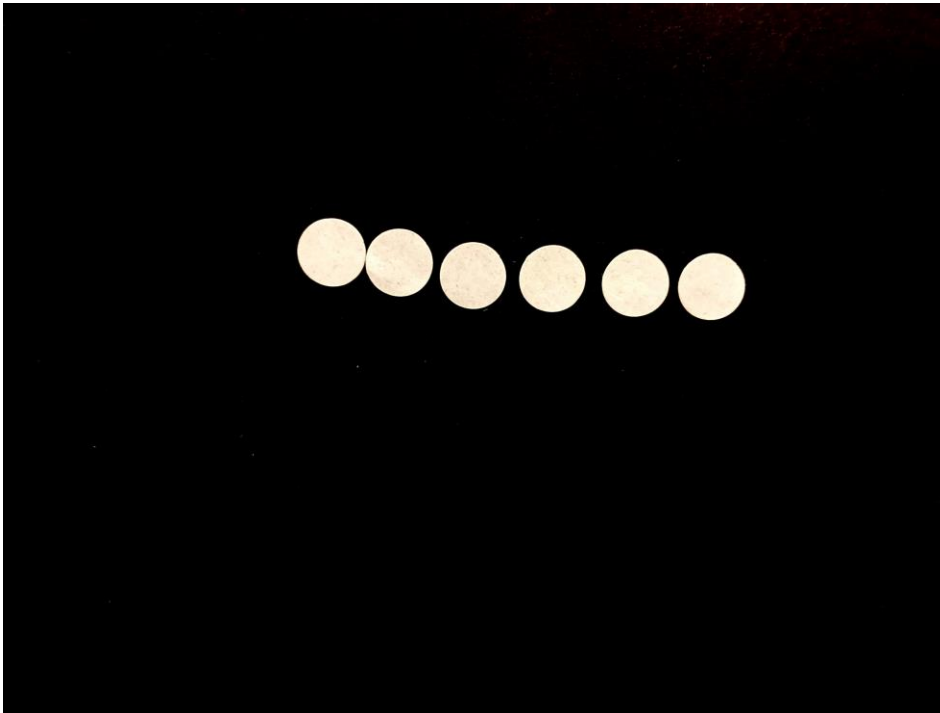
グループ展

2022 「OPEN STUDIO 2022」東京藝術大学元町中華街校舎
2022 「IAG AWARD 2022」東京芸術劇場
2022 「第2回みやぎ総合美術展」宮崎県立美術館
2022 「MEDIA PRACTICE 21-22」東京藝術大学元町中華街校舎
2021 「環ジョウ交差点」佐賀大学美術館
2021 「CAF賞2021 入選作品展覧会」代官山ヒルサイドフォーラム
2021 「NIME2021」上海ニューヨーク大学／オンライン
2021 「(Sound) Interaction 2021」gallery CHIKA
2021 「音楽環境創造科卒業研究発表会 2021」東京藝術大学千住校舎
2020 「寝床 a.k.a. 混淆する幻想半径」shibuya-san
2020 「バトルフィールド2」Room_412
2019 「千住 Art Path 2019」東京藝術大学千住校舎
2019 「ICSAF2019」尚美学園大学
2019 「バトルフィールド」Room_412
2018 「千住 Art Path 2018」東京藝術大学千住校舎
2018 「あの子のこと」KISYURYURI THEATER

受賞・助成

2022 クマ財団支援クリエイター6期採択
2022 IAG AWARDS 2022 ファイナリスト
2022 第2回みやぎ総合美術展 自由表現部門 準特選
2021 CAF賞2021 ファイナリスト
2021 三菱商事アート・ゲート・プログラム奨学生採択
2021 NIME2021 インスタレーション部門採択
2021 東京藝術大学同声会賞
2020 東京藝術大学安宅賞
2020 武蔵野音楽環境創造教育研究助成金

眞藤雪乃 / Yukino Mafuji
《エンドロール》 2022 9' 02”



【作品解説】

私は映画が好きだった。私は映画が嫌いになった。

【略歴】

2018 京都市立銅駝美術工芸高等学校 卒業

2022 武蔵野美術大学造形学部油絵学科油絵専攻 卒業

2022 武蔵野美術大学大学院造形研究科修士課程美術専攻油絵コース 在学中

2021/03 個展「夢幻じゃない時間」room_412

【ステートメント】

文字や言葉、絵画などを通じて、物事への個人的解釈を試みる。

【URL】: <https://sites.google.com/view/mafujiyukino>

元岡奈央 / Nao Motoka
《Substitute》 2021 2' 59"



《Intermission》2022 7' 58"

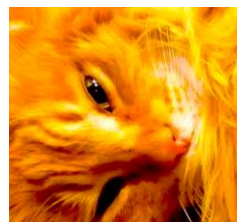
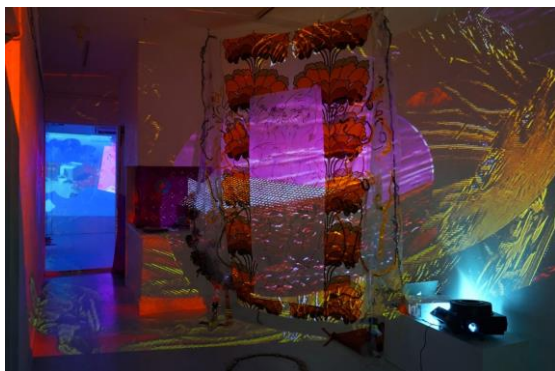


【略歴】

1998年 愛媛県松山市出身
東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業

【ステートメント】

ホームビデオからインスタレーションを制作する。インテリアや下着のデザインも行う。身体や物の所有権に興味を持ち骨董を集める。主に戦後の着物の収集を行う。



【URL】: <https://motokanao.tumblr.com/>

Poppy Milk Party 2022

大本梨奈 / Rina Ohmoto
《Caught into the points》 2021 15' 01”



【作品解説】

自身が2018年から続けて行っている「vague」というプロジェクトから派生した動画作品。このプロジェクトは心の中、身体、そのほか周囲を取り巻くものなど、その境界線は曖昧であるという考えから始まった。今作は「一つの物事に囚われて抜け出せない」

【略歴】

1994 年生まれ、兵庫県出身の作家
2017 神戸芸術工科大学 ファッションデザイン学科 テキスタイル専攻 卒業
2019 武蔵野美術大学 修士課程 造形研究科 修了
2019.5 個展 Vague gallery room412 にて
2021.1 個展 Vague2 gallery room412 にて

【ステートメント】

身体を中心とした空間で起こることを基に作品を制作

【URL】: <https://bijutsutecho.com/artists/994>

佐々木万志帆 / Mashiho Sasaki

《ましほ日記》 2022 9' 22”

ましほ日記

【作品解説】

普段平面作品ばかりの私だけれど、日常では映像を撮っていることが多かった。
今回お見せするのは完全なるホームビデオと昨年11月に行った姉妹展の映像。

「忘れっぽいから」

後で見えて思い出したくて撮っている映像は、私の記憶の整理整頓には欠かせない。

思い出した時のいきた感情が私となる、
悲しいも、嬉しいも全部。

この映像は意味なんて持たせない。

繋がっている。

何気ない毎日が、私をつくっているのだなあ実感する。

人間っぽい、いきもの

【略歴】

1994年 東京で生まれる(ソイソーススタジオ 清瀬市)

2013年 横浜調理師専門学校入学し調理師免許取得

2013年 フランス料理店で勤務

2019年 美学校にて「描く日々」「造形基礎」を受講

「展示」

2019「猫と猫たち」

2019「美学校 第51期生 アンデバンダン展」

2020 美学校「描く日々」修了展「息ずってはいく」

2020 美学校「造形基礎」修了展

2020 Independent Tokyo 2020「オヤコース」

2021 Room_412にて初個展「昼と夜のあいだ」

2021 3331 ART FAIR

【ステートメント】

文字や言葉、絵画などを通じて、物事への個人的解釈を試みる。

【URL】

Instagram: <https://www.instagram.com/mashio1337/?hl=ja>

HP: <https://www.mashiho.net>

OIL by 美術手帖: <https://oil.bijutsutecho.com/artist/1698>

佐藤 瞭太郎 / Ryotaro Sato

《All Night》 2022 6' 20"



【作品解説】

安部公房による短編小説『変形の記録』から着想を得て、ネット上にある3Dモデルを用い制作した映像。乗客たちは暗闇の中で座席に身を沈め、浅い眠りについている。ここではないどこかの風景を夢見ながら、その身体はバスの振動で震えている。だが、身体も、振動も、風景も、すべてが少しずつずれていく。彼らはバスに揺られて移動しているようで、そのふりをしていただけだった。関係のないものたちが集まり、接触し、散逸していくまでのロードムービー。

【略歴】

1999 北海道生まれ
2021 筑波大学芸術専門学群構成専攻 卒業
2022 東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻 在籍

個展

2022 「Exercise For Drifting」コ本や honkbooks、東京

グループ展

2022 「NITO11 new次元への突入」アート/空家 二人、東京
2022 「ASK?映像祭2022」art space kimura ASK?、東京
2022 「OPEN STUDIO 2022」東京藝術大学元町中華街校舎、神奈川
2022 「MEDIA PRACTICE 21-22」東京藝術大学元町中華街校舎、神奈川
2022 「第27回学生CGコンテスト オンライン・ノミネート作品展」オンライン
2021 「OPEN STUDIO 2021」東京藝術大学元町中華街校舎、神奈川
2021 「総合造形領域卒業・修了研究成果展」筑波大学体芸エリア、茨城
2021 「第26回学生CGコンテスト オンライン・ノミネート作品展」オンライン
2021 「ANTEROOM TRANSMISSION vol.1 - 変容する現在の肖像」HOTEL ANTEROOM KYOTO、京都
2020 「CAF賞2020」代官山ヒルサイドフォーラム、東京

受賞歴

2022 ASK?映像コンペティション2022 入選
2022 第27回学生CGコンテスト 審査員賞
2022 やまなしメディア芸術アワード 入選
2021 第26回学生CGコンテスト 評価員賞
2020 CAF賞2020 入選



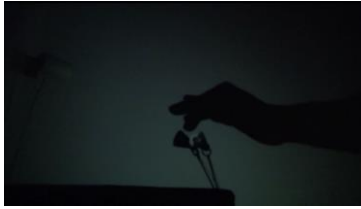
Photo by 永田風薫

【ステートメント】

過去の文学や映画、インターネット上を流通するデータを引用/サンプリングすることによって、今日における事物の移動と変形について思考する映像作品を中心に制作している。

【URL】 : <https://ryotarosato.com>

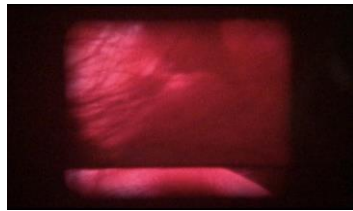
鈴木彩奈 / Ayana Suzuki
《The Sleepers》 2019 1' 29"



《Smoke》 2019 3' 29"



《ゆっくりと、息をする》 2022 4' 32"



【作品解説】

直感的に伝わる映像作品、観る者の感情に直接訴えかける「映像詩」ともいえる作品となっている。。

【略歴】

1997年生まれ
東京藝術大学 美術学部 絵画科油画専攻 在籍
カタルシスをテーマに様々な媒体で作品を制作。

【ステートメント】

生きることは本来的に単純な繰り返しであり
それ自体がかけがえのない営為である。

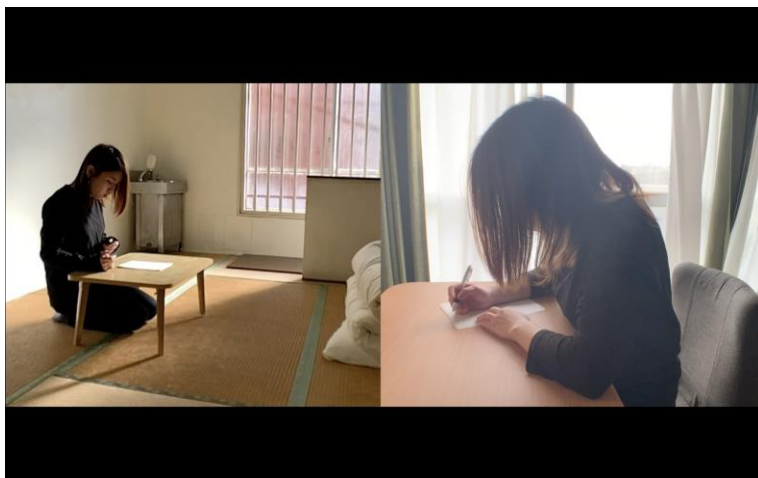
記憶の中のイメージの出現と消失
曖昧な世界で言葉にできない感情

わたしは
木の枝に
空気に
あなたの手に
心に
触れる

移ろいゆくものたちの中で
いつかの私は変わらぬまま

柳田美侑 / MIYU YANAGIDA

《ポジティブさん》 2022 12' 32”



【作品解説】

作品《ポジティブさん》は、実際にあった出来事を元に作られた映像作品であり、そこではオレオレ詐欺の加害者として少年院に送られた娘と母親が手紙を通してやりとりする様子を柳田本人がひとり2役で演じたものである。映像は、ひとつの画面を左右に分割したもので、画面左では柳田扮する娘が少年院の中で母親に宛てて手紙を書いている。画面右でも柳田が母親に扮し、自宅のリビングから娘に宛て手紙を書く様子が写されている。「扮した」と書いたが、見かけの差異は無く着ている服も同じで、手紙の内容からでしか娘か母親かの違いを認識することは出来ない。手紙の内容は字幕として表示され、鑑賞者はその文面により二人の心情を覗き見することになる。娘の手紙には、娘が犯罪を犯すまでの経緯が詳細に書かれているため、友人関係や家族関係を理由に社会から孤立していく様子も伺うことが出来る。一方母親はそのような娘の独白に対し、子が成長するに従い、母親という立場から家庭の外の社会へと自身の生きがいを見出していく過程が描かれる。この手紙のやり取りから、互いの関係性を確かめているようにも伺えるが、一方、永遠に分かれない孤独な二人の立場が強調されているようにも見える。この映像の奇妙さは、分かり合えない二人の姿が作者の柳田自身であり、独り言のようにも見えることである。タイトルの《ポジティブさん》とは、正しく柳田自身のことを指している。その家族に起こった悲劇を、娘と母親を柳田の姿によって鏡像として描くことで、親子の立場が反転するかのような錯覚をひき起こさせ、同時に加害者と被害者の立場も反転させる。但し、言葉や立場が交換されたからといって、わかり合えたことにはならない。柳田は、個人と個人がわかり合うことの不可能性を前提とした上で、柳田自身が《ポジティブさん》に成ることで、わかり合うという幻想を、身をもって引き受ける。(小林耕平)

【略歴】

1996年 東京生まれ

2016年 武蔵野美術大学入学

2020年 武蔵野美術大学卒業

武蔵野美術大学院修士課程美術専攻油絵入学

2022年 武蔵野美術大学院修士課程美術専攻油絵入学卒業

展示履歴

2018年「painting fields forever」武蔵野美術大学芸術祭 二人展

「SOLID SLIDER :street」東京造形大学CSlab グループ展

2020年「painting action」ギャラリーroom_412 個展

「ムササビの油」新宿美術学院 SHINBI GALLERYにて大学院選抜展

2021年「スライドする風景」グループ展(学生コンペ「Mのたね」企画展 第2期) MUJcom
武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス

【ステートメント】

体験した出来事を基に、他者とのコミュニケーションで感じる得体の知れない奇妙な肌触りを架空の状況と言語によって再演する。このやり取りは今もどこかで繰り返し再演され続けていく。他者との会話、部屋で一人考え続ける自分との対話、途絶え続けることのないこの事象をせめて前向きに感じながら行きたい。



「スライドする風景」グループ展(学生コンペ「Mのたね」企画展 第2期)展示風景 2021年



映像作品「絵を持って走る」2018年



映像作品「お父さん不倫しないで」2021年



「Untitled」 2018年 274mm×220mm



「Untitled」 2018年 150mm×100mm